

人権コラム 心、豊かに

◆ 命を貴ぶ「責任」

「いじめ」を原因とした悲しい事件が後を絶ちません。そして、その「いじめ」のほとんどが学校現場で起きています。「いじめ」をなくすことは不可能なのでしょうか。

2013年、ユニセフなどが行った「先進国における子どもの幸福度調査」によると、日本は「いじめ」の割合などを示す「日常生活上のリスクの低さ」で1位。しかし、「実際に学校でいじめられた経験の割合」が、30カ国中12位となっていることは、穏やかな風土の中で、じわじわと「いじめ」が繰り返されている現状を示しています。

「いじめ」は文部省、都立教育研究所、警視庁がそれぞれ「定義」を明確にしています。自殺に追い込んでしまうような事例も定義に沿って判定が行われます。1994年、愛知県で「いじめ」を苦に命を絶った生徒の父親は、「定義や判定が重要ではない。人を傷つけ疎外する行為そのものが問題のはずだ」と語っています。判定にこだわり過ぎる傾向は、「いじめ」を認めたくない胸の内を表しているような気がします。

学校現場で「いじめ」による事件が起きると、マスコミなどが学校の対応に疑問を投げかけます。「いじめ」の感知や担任の言動に視点が注がれ、加害児童の責任がぼかされてしまう風潮は長く変わっていません。さらに、第三者の「いじめられる側にも責任がある」などの、自己の見解だけによる無責任な発言には、差別を助長する心理状態が重なって見えます。「成長過程の子どもの多様複雑な人間関係や家庭を含む社会環境に起因する」と片付けられてしまいがちな「いじめ」。しかし、心身に大きな苦痛を与え、場合によっては命の存亡に影響するような行為は、恐喝や暴行に匹敵し、一生涯にわたり責任を負う愚行であることをしっかりと胸に刻ませる導きが必要なのかもかもしれません。